

1950年代における夜間定時制高校の生徒文化

一草の根教養主義の変容を中心に

前田 崇（千葉大学）

1. はじめに

1. 1. 研究の目的

本研究の目的は、地方都市に位置した夜間定時制高校を事例として、1950年代における定時制高校の生徒文化、とりわけ、教養主義（草の根教養主義）の変容を明らかにすることである。従来の教養主義研究の対象はエリート学生が中心であったが、こうした研究により、当時の青年層の多数派であった中下層の人々の教養主義（草の根教養主義）に関する新たな知見を得ることができると考える。

1. 2. 分析の枠組みと方法

藤田（1993）と久富（1996）の学校文化に関する図式・枠組みを参考にし、図1のように定時制高校における生徒文化を分析するための枠組みを設定する。また、生徒の意識、読書率、読書傾向、所属クラブ活動の傾向、学校行事の動向を具体的な分析項目とする。

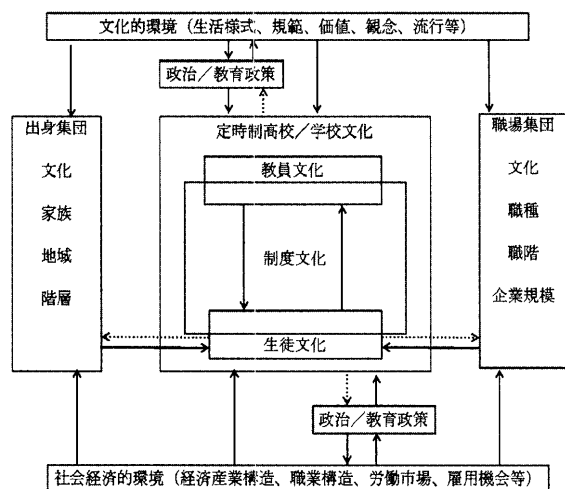


図1 定時制高校の生徒文化の分析枠組み

分析の方法に関しては、各種の文書・資料等に基づいた歴史的な実証研究の手法を用いる。具体的には、生徒の実態調査・読書調査などの統計資料を用いて、生徒の社会的属性や読書傾向などを数量的に把握するとともに、公文書、

学校新聞、生徒会誌、生活記録などの質的資料を用いて質的な分析を加える。

1. 3. 分析の対象

先行研究において、定時制高校は地域の社会的コンテクストによって様相や機能が異なるため、①都市型、②地方都市型、③農村型という三類型に分類されている（片岡，1993）。本研究では、千葉市に位置した千葉県立千葉高等学校定時制課程（千葉高定時制）を地方都市型定時制高校の事例として、分析の対象とする。千葉高定時制は旧制夜間中学を前身とし、1948年に新制高校（夜間・普通科・四年制・全日制と併置）として発足した。

2. 考察

1950年代前半には、勤労青少年が通う定時制高校においても、戦後民主主義や戦後教育の理念を後盾にして、生徒文化の中に教養主義の傾向が強かった。ただし、そこには大衆文化や修養主義が混在しており、中間的な文化であったと考えられる。例えば、生徒の読書調査（1951年）によれば、生徒の読書率は、「よく読んでいます」18%、「読んでいます」74%、「読んでいない」8%で、何らかの形で読書をしている生徒が92%と、ほとんどの生徒が読書をしている。読書傾向に関しては、印象に残った本として、『宮本武蔵』、『女の一生』、『風と共に去りぬ』、『狭き門』、『嵐が丘』、『春のあらし』、『若きヴェルテルのなやみ』、『ああ無情』等があがっている。大衆文化の象徴ともいえる吉川英治『宮本武蔵』が、印象に残った本として挙げられている一方で、ゲーテ『若きヴェルテルのなやみ』やジイド『狭き門』、ヘッセ『春のあらし』、モーパッサン『女の一生』、エミリー・ブロンデ『嵐が丘』、ユーゴー『ああ無情』といった準教養主義的な作品が多く含まれてお

り、準教養主義的な作品の中に大衆文化的な作品が混在している。

生徒の所属したクラブに関しても、教養主義に親和的な文芸部、新聞部、弁論部に所属している生徒が、運動部に所属している生徒よりも多く（1950年）、特に弁論部に関しては、1950年代後半と比較すると、部員数が非常に多く、学校内外で弁論大会が行われ、活発に活動していた。また、図書館の利用者数も1955年までは上昇する傾向にあった。

こうした生徒文化が形成された要因として、1) 教員文化の影響、2) 生徒の社会的属性、3) 都市型定時制高校に比べて低い大学進学率があげられる。第一に、教員文化に関して、教員の学歴、読書遍歴、意識を分析したところ、帝国大学や旧制高校の出身者は多くはないが、学生時代に典型的な教養書や人文・社会科学書などを読み、教養主義を強く内面化している教員がおり、こうした教員が生徒文化に影響を与えていたと考えられる。また、新制定時制高校発足から間もない頃には、教員が教授内容を比較的自由に設定することができる制度文化が存在し、社会科のある教員は古本屋で憲法やマルクス主義関係の文献を買い求め、それを題材にして授業を行っていたという。

第二に、定時制高校生は、勤労青少年として、職業社会で働いており、戦後の現実社会を経験する中で、社会に対する批判的な認識が生まれ、その結果、能動的に人格の完成や社会改良の為に教養を求めようとする志向がみられた。第三に、この時期の地方都市型定時制高校の場合、大多数の生徒たちにとって、高校教育が学校教育のターミナル（終着点）になっており、学校文化に進学や受験の圧力が弱い傾向があったためであると考えられる。

1955年頃までは、教養主義が健在であったが、1950年代後半には、次第に後退していくきざしがみられた。例えば、クラブに関しても、教養主義に親和的なクラブの部員数が減少し、弁論大会が不活発化し、1958年には校内弁論大会が生活体験発表大会になっている。また、図書館の利用者数も低下傾向にあった。

この背景として、1) 生徒の属性（世代）の変化、2) 選抜度の低下による生徒の性質の変化、3) 高校進学率の上昇による高卒資格重視の風潮、4) 高度経済成長の開始による時代状況の変化があったと考えられる。

3. まとめ

1950年代前半には、勤労青少年が通う定時制高校においても、戦後民主主義や戦後教育の理念を後盾にして、生徒文化の中に教養主義の傾向が強かったことが確認できた。ただし、そこには、大衆文化や修養主義の要素が混在しており、中間的な文化であったと考えられる。また、定時制高校生は、勤労青少年でもあったため、現実の労働経験と社会批判・社会改良の意識や自己の教養を高めることが結びつけられており、ここには大学生のような読書のみによる自己形成とは異なった自己形成の形が存在した。1955年頃までは、生徒文化の中に、教養主義が健在であったが、その後、次第に後退していくきざしがみられた。

1950年代において、教養主義の本丸はエリート大学（とりわけその中でも文学部）であったが（竹内、2003）、地方都市の定時制高校では、中下層に属する生徒たちが教養主義の影響を受けつつ、生徒文化の中に草の根教養主義を生み出していた。この時期の地方都市型定時制高校は、教養主義の普及・変換装置であると同時に、草の根教養主義の生成装置であったと考えられる。

<主要参考文献>

- 天野正子、2005、『つきあいの戦後史』吉川弘文館。
- 藤田英典、1993、「学校文化への接近」木原孝博・武藤孝典・熊谷一乗・藤田英典編著『学校文化の社会学』福村出版。
- 片岡栄美、1993、「戦後社会変動と定時制高校—都市型および農村型定時制高校の変容の比較—」『関東学院大学文学部紀要 第68号』関東学院大学人文学会。
- 久富善之、1996、「学校文化の構造と特質」堀尾輝久、久富善之ほか編『講座学校 第6巻学校文化という磁場』柏書房。
- 前田崇、2009、「戦後復興期から高度経済成長期の社会変動と定時制高校の社会的機能の変容」日本学習社会学会『日本学習社会学会年報』第5号、日本学習社会学会。
- 竹内洋、2003、『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』中公新書。
- 筒井清忠、1995、『日本型「教養」の運命』岩波書店。